

《研究ノート》

MMPI 日本語版使用者のための MMPI-2

井 手 正 吾

札幌学院大学

キーワード：MMPI-2, 日本語版MMPI, ロールシャッハ・テスト

I はじめに

MMPI-2の全体的な概要について、小口(2001)を主な資料として、Greene(1991)、Butcher(2000)なども参考としてまとめてみた。MMPIの発展型であるMMPI-2について理解することは、まだ公刊されないままである(2019年12月時点)日本でMMPI日本語版を使用している臨床家にとってその臨床活用の幅を拡げることにもつながるかもしれない。

MMPI-2は1989年、Butcher, Dahlstrom, Graham, Tellegen, KaemmerによってMMPIの改訂版として公刊された。MMPI-2が公刊された後もオリジナルのMMPIはかなり使われていたようだが、1999年には解析サービスなど中止などもあり米国では現在MMPIは使えなくなったようである。

MMPI-2は、567項目の文章から構成されており、13の基礎尺度(?尺度が除かれている)に加えて15の内容尺度が標準尺度となっている。MMPIの原点とも言えるカード形式の検査用具は、検査学的な動向もあるのか、残念ながら公刊されていない。だが、MMPIはロールシャッハ・テストとならんで臨床心理検査としては、その使用量そして研究量は他の検査とは群を抜いており、MMPI-2はその豊かな臨床的蓄積を活かせるよう継承できるように考慮して改訂されたMMPIと連続性をもった検査となっている。

II MMPI-2の概要

MMPI改訂の基本指針とその経過

MMPIの改訂は1982年よりButcherとDahlstrom、そしてGraham、Tellegenが加わり着手

された。改訂の基本的な指針は、1) MMPIは米国の一部の地域だけの住人をもとに標準化されていたが、全米を代表するような標準化集団を用いたより適切な標準化、2) 時代的に古くなったり、差別的ととられるような項目文章の改廃、3) 婚姻状況や嗜癖、自殺などの現在の臨床的関心の高い領域でMMPIの項目では不足していた項目を新規項目とする、4) MMPIで蓄積されている豊かな臨床的資産、特に妥当性尺度と臨床尺度に関係するものを継承する、といったところである。改訂作業のため、MMPIの項目修正や新規の項目が加えられた704項目からなるAX booklet (Form AX やMMPI-AX と呼ばれることもある) が作成され検討が進められた。また、より適切な統計処理なども考案されていった。

MMPIの継承ということで、基礎尺度としての妥当性尺度や臨床尺度に関しては、変更を最小限に抑えられた。科学的に洗練されたEvidence Basedな動向が強い米国の状況で、もっとも泥臭く検査学的には批判されるところの大きい基礎尺度を重視した改訂が行われたのは、MMPIの臨床的資産の大きさを感じるところである。

検査刺激：項目文章

MMPIは550項目で構成され、その項目文章に「あてはまる・True」か「あてはまらない・False」で回答してもらい、「どちらともいえない Cannot Say」も許すという目録式の検査である。カード形式 (Card Form) は当然550項目であるが、冊子形式 (Booklet Form) は回答用紙の関係から16項目の重複項目があり566項目で構成されていた。ロールシャッハ・テストはインクプロットという視覚的題材が検査刺激であり、あまり文化や社会の影響は受けないが、MMPIは項目文章という言語刺激であり、文化や社会の影響を大きく受ける題材materialであり、ある程度の歳月がたつと項目文章の改廃は致し方ないところである。

MMPI-2は、基本的に冊子形式のみで567項目という中途半端ともいえる項目数となった。MMPI-2のマニュアルによると、392項目はMMPIと同一の項目文章であり、68項目がMMPIで用いられていた項目文章を修正されたものとなっている。107項目が新たに加えられた項目文章であり、オリジナルMMPIの90項目が削除されているとなっている (小口, 2000)。項目文章の構成を検討したLevitt,E.E. (1990) によると394項目がMMPIと同一で、66項目が修正項目となって、90項目が削除されたとしている。

また、研究版であるがMMPI-2北里・旭川版を作成した小口 (2000) は、日本語版作成にからんで項目文章構成を詳細に検討して、390項目がMMPIと同一文章、70項目が修正項目としている。さらに、新規項目とされている107項目のうち、5項目はMMPIにある項目と文意的には非常に類似したものとしている (修正項目とは表現していないが、小口によると全くの削除項目は85項目となる)。

若干の差異はありMMPIらしいと思うところであるが、MMPI-2はオリジナルMMPIと比較し、70% (約390項目) ほどは同一であり、12% (約70項目) ほどが修正され文意的には等質

の項目とされ、18% (110項目弱) ほどが全く新しい項目となっているといえよう。8割以上はMMPIと一致しているとみてよいだろう。

削除された項目は時代的にあわなくなったものとされている。削除された項目で多いのは、宗教関連の項目である。日本においても被検者からキリスト教や宗教がらみの項目に違和感をもったという感想はよく聞くとところであるし、世界的にもキリスト教にかたよった項目文章には批判が強かったようである。また、時代的变化もあり男女の性役割についての項目も削除された項目が意外に多い。参考までに、小口を参照してのMMPI-2では削除されたMMPI項目の一覧をTable 1に示す。なお、項目番号は新日本版のものである。なお、90ほどの削除された項目のうち、基礎尺度の採点キーで削除されたものは13項目である。妥当性尺度・臨床尺度を算出するための項目はMMPIでは383項目であったが、当然ながらMMPI-2では370項目となっており、これらは370番までに配置されている。

項目文章の修正は、句読点の変更や文法的な訂正と言ったものから、時代的に古くなった表現(単語・熟語・言い回し)の変更、性差別的ととられる表現の訂正などである。文意的にはMMPIの項目文章と同じとみて問題ないとされている。なお、修正された項目のうち51項目は、基礎尺度の採点キーとなっている。全修正項目数(約70項目)の約3/4は、妥当性尺度・臨床尺度の項目となっている。

新規にとり入れられた107ほどの項目文章は、時代的な風潮や現代の精神医学・臨床心理学的で注目されている病理・傾向に関する内容で、MMPIの項目では不充分だったような項目とされている。具体的には治療準備性(アドヒアランス, コンプライアンス)や婚姻適応, タイプA行動に関連するような文章が含まれている。

MMPI-2の項目の配列・順番はどう意図されたかの詳細は分からないようだが、MMPIとの関連を考慮したのか、先にも述べたが1番から370番までに、妥当性尺度・臨床尺度に関連する

Table 1. MMPI-2で削除されたMMPI項目一覧

14	53	58	63	69	95	98	206	249	258
295	331	387	393	398	403	406	408	409	411
415	420	422	423	424	425	427	428	429	433
435	436	440	441	442	444	446	452	453	454
456	457	460	462	467	470	473	474	476	478
479	483	486	488	489	490	491	493	496	497
498	502	503	508	512	513	514	515	519	523
524	528	530	533	535	537	538	540	541	542
545	546	547	548	549					
120	412	430	459	484	*				

数値は新日本版MMPIの項目番号

*小口(2000)でMMPI-2に対応する項目があるもの

項目が含まれている。371番から475番までは、新旧の項目が入り交じり、475番以降は新たに追加された項目となっている。MMPIの冊子形式の項目番号とMMPI-2の項目番号が同一の項目は非常に少ない。なぜかしら、1番から5番まではMMPIと同一番号の項目だが、その後は殆ど同一番号の項目はなく、筆者が確認したところ、MMPIとMMPI-2の項目番号が同じものは、わずか11項目である。

基礎尺度 (妥当性尺度・臨床尺度)

MMPI-2では、MMPIでもあまり重視されていなかった? (Cannot Say, 疑問) 尺度が妥当性尺度から除かれたが、他の13尺度は基本的にはMMPIと同一のものが引き継がれた。妥当性尺度は、L尺度、F尺度、K尺度の3つである (MMPI-2公刊時より補足的にFb, VRIN, TRINという検査態度に関連する尺度が用意されていたが、その後かなり標準的に使われるようになってきているようである)。臨床尺度は、MMPIと同じで1 (Hs) 尺度、2 (D) 尺度、3 (Hs), 4 (Pd), 5 (Mf) 尺度、6 (Pa) 尺度、7 (Pt) 尺度、8 (Sc) 尺度、9 (Ma) 尺度、0 (Si) 尺度となっている。

MMPI-2の基礎尺度の項目構成をMMPIと比較したものをTable 2に示す。修正項目がどれほど含まれているかも記してある。基礎尺度は、項目文章の変更で表のように項目数が若干減った尺度があるものの、MMPIから連続したもの、同一のものと扱われている。なお、Tスコアは、従来のLinear T scoreから、パーセンタイルレンジなどを考慮した各尺度の直接比較に問題が少ないUniform T score がとりいれられている。心理検査学的に洗練されたと強調される場所である。しかし、基礎尺度でUniform T score がとりいれられているのは、狭義の臨床尺度 (5尺度と0尺度を除く8尺度) であり、他の追加尺度なども含めると従来のLinear T scoreが使われている尺度も多い。

内容尺度

MMPIにも、Wiggins Content Scale などの内容尺度はあったが、MMPI-2では、標準尺度として内容尺度 (Content Scales) が加えられた。

MMPI-2の内容尺度は15からなっており、1) ANX (Anxiety・不安) 尺度、2) FRS (Fears・恐怖) 尺度、3) OBS (Obsessiveness・強迫) 尺度、4) DEP (Depression・抑うつ) 尺度、5) HEA (Health Concerns・健康関心) 尺度、6) BIZ (Bizarre Mentation・奇異思索) 尺度、7) ANG (Anger・怒り) 尺度、8) CYN (Cynicism・皮肉) 尺度、9) ASP (Antisocial Practices・反社会的行動) 尺度、10) TPA (Type A Behavior・タイプA行動) 尺度、11) LSE (Low Self-Esteem・低自己評価) 尺度、12) SOD (Social Discomfort・社会的不快) 尺度、13) FAM (Family Problems・家族問題) 尺度、14) WRK (Work Interference・就労障害) 尺度、15) TRT (Negative Treatment Indicators・治療抵抗) 尺度である。MMPI-2の内容尺度の項目構

Table 2. MMPI-2とMMPIの基礎尺度構成ならび比較

尺度	MMPI		MMPI-2		削除項目		修正項目		
	総数	採点キー別	総数	採点キー別	総数	採点キー別	総数	採点キー別	
L	total	15	15	15	0	0	2	0	
	true		0	0	0	0		0	
	false		15	15	0	0		2	
F	total	64	60	60	4	14	14	9	
	true		44	41	3	9	9	9	
	false		20	19	1	5	5	5	
K	total	30	30	30	0	1	1	0	
	true		29	29	0	0	0	0	
	false		1	1	0	1	1	1	
1 (Hs)	total	33	32	32	1	5	5	3	
	true		11	11	0	3	3	3	
	false		22	21	1	2	2	2	
2 (D)	total	60	57	57	3	3	3	0	
	true		20	20	0	0	0	0	
	false		40	37	3	3	3	3	
3 (Hy)	total	60	60	60	0	9	9	3	
	true		13	13	0	3	3	3	
	false		47	47	0	6	6	6	
4 (Pd)	total	50	50	50	0	7	7	6	
	true		24	24	0	6	6	6	
	false		26	26	0	1	1	1	
5 (Mf)	male	total	60	56	4	6	6	1	
		true		28	25	3	1	1	1
		false		32	31	1	5	5	5
	female	total	60	56	4	6	6	0	
		true		25	23	2	0	0	0
		false		35	33	2	6	6	6
6 (Pa)	total	40	40	40	0	3	3	1	
	true		25	25	0	1	1	1	
	false		15	15	0	2	2	2	
7 (Pt)	total	48	48	48	0	3	3	3	
	true		39	39	0	3	3	3	
	false		9	9	0	0	0	0	
8 (Sc)	total	78	78	78	0	14	14	9	
	true		59	59	0	9	9	9	
	false		19	19	0	5	5	5	
9 (Ma)	total	46	46	46	0	7	7	5	
	true		35	35	0	5	5	5	
	false		11	11	0	2	2	2	
0 (Si)	total	70	69	69	1	6	6	2	
	true		34	34	0	2	2	2	
	false		36	35	1	4	4	4	

成をオリジナルMMPIとの同一項目がどれほどあるかを含めてTable 3に示す。なお内容尺度はセットとなった尺度群としてUniform T score が使われるようになっている。

TRT 尺度ではオリジナルMMPIの項目は半分以下で極端に少ない。しかし、MMPI-2に新たに加えられた項目は、先にも触れたがこのあらたなMMPI-2内容尺度の作成も意図されていたようだが、それを考えると意外にMMPIと同一・修正項目が多いことがわかる。TRT 尺度やTPA 尺度といった傾向・特性は、オリジナルMMPIの追加尺度ではあまり見られないところである。しかし、他の内容尺度については、MMPIでもWiggins Content ScalesやIndiana Rational Scales などに同じような傾向・特性をとらえようとする尺度はみられ活用されている。

補助尺度・追加尺度

標準尺度に加えて、補助尺度 (Supplementary Scales) が公刊当初より加わっていた。MMPIでは追加尺度や特殊尺度ともよばれていたが、MMPI-2では補助尺度とされているようだ。A (不安) 尺度, R (抑圧) 尺度, P K (PTSD) 尺度, MAC (アルコール依存) 尺度などの

Table 3. MMPI-2内容尺度の構成ならびMMPIとの関連

尺度名	MMPI-2		MMPI		尺度名	MMPI-2		MMPI	
	総数	採点キー別	総数	採点キー別		総数	採点キー別	総数	採点キー別
ANX	23	t	18	20	t	16	22	t	20
		f	5		f	4		f	1
FRS	23	t	16	22	t	15	19	t	12
		f	7		f	7		f	0
OBS	16	t	16	10	t	10	24	t	11
		f	0		f	0		f	3
DEP	33	t	28	25	t	20	24	t	10
		f	5		f	5		f	11
HEA	36	t	14	36	t	14	25	t	12
		f	22		f	22		f	5
BIZ	23	t	22	19	t	18	33	t	19
		f	1		f	1		f	5
ANG	16	t	15	10	t	10	26	t	10
		f	1		f	0		f	3
CYN	23	t	23	21	t	21	23	t	10
		f	0		f	0		f	0

t : true f : false

MMPIで用いられていた尺度も多い。尺度の採点キーは、MMPIの項目そのまま、削除項目があれば構成項目数が減っているというものがほとんどである（MACはMMPI-2の新規項目を4つ加えてMAC-Rとしている）。

公刊当初より、MDS (Marital Distress・夫婦間問題) 尺度、APS (Addiction Potential Scale・嗜癮潜在性) 尺度などのMMPI-2で開発された新しい尺度もみられる。

先にも触れたが、補助的な妥当性尺度も作成されている。公刊時にみられたものに、FbとVRINならびにTRINがあった。Fb (Infrequency Back) は、F尺度に関連した尺度で、新たにとり入れられた項目が多いMMPI-2の後半にみられる低頻度回答をもとにした尺度である。F尺度とからめて、検査時間経過によつての検査態度の変化などをとらえようとするものである。VRINとTRINは、MMPIにあるCLS (不注意尺度) やTS (再検査指標) に類似したものである (村上・村上, 1992; 井手, 2015; 等参照)。

VRIN (Variable Response Inconsistency) は、矛盾した回答となる67対項目の回答の一覧があり、それに被検者の回答がいくつあてはまるか (該当数) が、粗点となる。それをTスコアに変換する。(MMPIの項目では、45対の項目が使える)。基本的な目的としては、CLS (不注意尺度) やTS (再検査指標) と同じように、矛盾した回答により、いいかげんな回答傾向をとらえようとするものである。

TRIN (True Response Inconsistency) もVRINに類似した回答傾向をとらえようとするものであるが、やや複雑である。両者とも「あてはまる・true」と回答すると矛盾する14対の項目の該当数①と、逆に両方に「あてはまらない・false」と回答すると矛盾する9対の項目への該当数②をもとめる。①から②を減算し、それに9を加算して粗点を算出する。粗点は0から23の値をとることになるが、それをTスコアへと変換する。MMPIでも回答是認率 (T percent, Tper) などが一つの指標として用いられることがあるが、是認傾向、否認傾向などもとらえるものである。MMPIにおいても12対と8対の項目が利用できる。VRINとTRINは、その後も標準的な妥当性尺度として用いられるようになってきているようだが、興味深い尺度のように思われる。

公刊後も、臨床尺度の下位尺度をはじめとして、オリジナルMMPIで用いられ活用されていた多くの追加尺度がMMPI-2でも用いられるようになってきている。また、MMPIらしく新たな補助尺度・追加尺度が開発されていっている。また、Koss & Butcher (1973) やLacher & Wrobel (1979) などの危機項目もMMPI-2でも引き継いで活用されている。

Ⅲ さいごに：MMPI-2に向けてのMMPI 日本語版の活用

MMPIは日本においても心理学では有名な検査であり入門的な概論書にも記載されている。しかし、日本における実質的な臨床的活用は非常に低い状況にあった。新日本版MMPI (新日

本版MMPI研究会, 1993) や村上・村上 (1992) のMMPI-1が公刊されてMMPIの臨床的な活用はかなり多くなってきてはいるようだ。しかし, ロールシャッハや知能検査などと比べると, 使用量も研究量もかなり寂しい状況は続いている。

MMPIの改訂版であるMMPI-2が米国で公刊されてかなりの歳月がたった。世界的に言えば, MMPIとロールシャッハは更なる展開が進んでおり, ロールシャッハにおけるExner, J.E.の展開 (Exner 2003 中村・野田監訳 2009) やR-PASの開発 (Meyer et al. 2011 高橋監訳 2014) などは既に日本にも導入されている。MMPI-2についても世界的にはMMPIでも定番のテキストは次々に刊行されている (Grahame, 2000:Greene, 2000:Friedman et al., 2001:Graham, 2006)。日本においては, 研究版である北里・旭川版MMPI-2 (小口, 2000) のグループが精力的にMMPI-2にとりくんでいるところはある。MMPI-2の日本語版の公刊の動向について以前より噂を聞くところではあるが, いまだMMPI-2は日本では公刊されていない状況にあり (2019年12月時点), これも寂しく感じる場所である。

ロールシャッハとMMPIは, 被検者の反応を重視してそれを元に作成された, ある意味非常に泥臭く人間臭い検査である。MMPIもロールシャッハも公刊当初より検査学的, 科学的にはかなり問題が指摘されてきた。その後, いずれも検査学的にかなり洗練されてきているところもある。しかし, どちらの検査も基本的に泥臭く人間臭いところ故に, 複雑で分かりにくい現実の人間の様々な側面をとらえ, 実際の臨床でも役立つところで臨床現場で支持されてきた検査とも言えるだろう。

MMPIの改訂版MMPI-2でもそのような特徴は継承され活かされているようだ。MMPI-2も妥当性尺度, 臨床尺度というMMPIの基幹的なところを維持し続けている。MMPIにおいては, やはり妥当性尺度, 臨床尺度という経験的手法・外的基準で作成された, 一見すると何を測っているのかわからないような, 多面的な意味合いをもつ尺度が中核になる。

その基礎尺度を中心にして, MMPI-2では標準尺度となった検査学的には分かりやすい内容尺度なども組み合わせて全体をとらえていくことが重要である。すなわちMMPIは基礎尺度だけでなく, 多くの様々な追加尺度 (意識的な側面が反映されやすい尺度や意識的には操作しにくい経験的手法で作成された尺度) を組み合わせて全体を組み立てていくという, ゲシュタルト的な解釈 (小川, 2001:小川, 2009:井手, 2013) のできる検査である。

MMPI-2が刊行されているのにいまだMMPI日本語版!世界的に見たら既に古くさい時代遅れな検査!と非難されたり, 自ら不安・懸念を抱くような臨床家もいるのではないだろうか。すなわち言えば, 筆者も抑圧したり反動形成的にMMPI-2に対していたところもある。今回, あらためてMMPI-2に対峙してみると, MMPI-2を含めたMMPIの臨床的有用性をあらためて思い知らされ, MMPIの活用をさらに広げ深めていくことの必要性を感じる場所である。日々の臨床の積み重ね, それをまとめる研究を地道に進めていきたいものである。

日本語版MMPIにおいても, さらに展開しているMMPIを取り入れられる場所は少なくな

いだろう。MMPI-2で開発された尺度や指標等を、ある程度の制限・限界はあるだろうが、日本語版MMPIでも利用できるだろう。逆継承とでも言えるかもしれないが、そのような活用、展開もあるだろう。それは、来たるべくMMPI-2あるいはさらなる改訂版の公刊への適切な移行の準備ともなるであろう。

文 献

- Butcher,J.N. (Ed.) (2000). *Basic Sources on the MMPI-2*. Minneapolis : University of Minnesota Press
- Exner,J.E. (2003). *The Rorschach : A Comprehensive System. Volume 1. Basic Foundations and Principle of Interpretation Fourth Edition*. John Willey and Sons,Inc.(中村紀子・野田昌道(監訳) (2009). ロールシャッハ・テストー包括システムの基礎と解釈の原理. 金剛出版)
- Friedman,A.F., Webb,J.T. & Lewak,R. (1989). *Psychological Assessment with the MMPI*. New Jersey: Lawrence Erlbaum Associates. (フリードマン,A.F.・ウェッブ,J.T.・ルヴァク,R. MMPI新日本版研究会(訳) (1999). MMPIによる心理査定 三京房)
- Friedman,A.F., Lewak,R. Nichols,D.S. & Webb,J.T. (2001). *Psychological Assessment with the MMPI-2*. Mahwah, New Jersey: Lawrence Erlbaum Associates.
- Graham,J.R. (2000). *MMPI-2 : Assessing Personality and Psychopathology THIRD EDITION*. New York : Oxford University Press.
- Graham,J.R. (2006). *MMPI-2 : Assessing Personality and Psychopathology FORTH EDITION*. New York : Oxford University Press.
- Greene,R.L. (1991). *The MMPI-2/MMPI: an Interpretive Manual*. Allyn and Bacon
- Greene,R.L. (2000). *The MMPI-2: an Interpretive Manual*. Boston: Allyn and Bacon.
- 井手正吾 (2013). 心理診断から研究へ MMPIを通して 臨床心理学13. pp.370-374.
- 井手正吾 (2015). MMPI活用のための基礎資料:結果一覧とその解釈資料. MDG 資料
- Koss,M.P. & Butcher,J.N. (1973). A comparison of psychiatric patients' self-report with other source of clinical information. *Journal of Research in Personality*, 7,225-236.
- Lachar,D. & Wrobel,T.A (1979). Validating clinicians' hunches: Construction of a new MMPI critical item set. *Journal of Consulting and Clinical Psychology*,47, 277-284.
- Levitt,E.E. (1990). A Structural Analysis of the Impact of MMPI-2 on MMPI-1. *Journal of Personality Assessment*,55, 562-577.
- Meyer,G.J., Viglione,D.J., Mihura,J.L., Erard,R.E. & Erdberg,P. (2011). *Rorschach Performance Assessment System : Administration, Coding, Interpretation, and Technical Manual*. English Agency Ltd.(メイヤー, G.J.・ビグリオン,D.J.・ミウラ,J.L.・エラード,R.E.・エルドバーグ,P.高橋依子(監訳) (2014). ロールシャッハ・アセスメント・システム 実施, コーディング, 解釈の手引き 金剛出版)
- MMPI新日本版研究会(編) (1993). 新日本版MMPIマニュアル 三京房
- 村上宣寛・村上千恵子 (1992). コンピュータ心理診断法—MINI, MMPI-1自動診断システムへの招待— 学芸図書株式会社
- 小川俊樹 (2001). アセスメント技法研究(1)—投影法. In 下山晴彦・丹野義彦(編)講座臨床心理学 2—臨床心理学研究. 東京大学出版会, pp.143-162.
- 小川俊樹 (2008). 今日の投影法をめぐって. In 小川俊樹(編) 投影法の現在(現代のエスプリ別冊), pp.5-20.
- 小口徹(編) (2001). 国際的質問紙法心理テスト MMPI-2とMMPI-Aの研究. 私家版

Introduction of MMPI-2 for User of MMPI Japanese Version

Seigo IDE

(いでせいご 札幌学院大学心理学部 臨床心理学科)